Midnight Waltz
ミッドナイト・ワルツ

Cedar Walton Trio
シダー・ウォルトン・トリオ

1. ブレモンズ・ブルーズ
Bremond's Blues《C. Walton》(5:11)
2. ターコイズ
Turquoise《C. Walton》(6:08)
3. シダーズ・ブルーズ
Cedar's Blues《C. Walton》(4:52)
4. ミッドナイト・ワルツ
Midnight Waltz《C. Walton》(9:37)
5. ホリー・ランド
Holy Land《C. Walton》(6:48)
6. テーマ・フォー・ジョビン
Theme For Jobim《C. Walton》(4:30)
7. ディア・ルース
Dear Ruth《C. Walton》(10:15)
8. ザ・ビジョン
The Vision《C. Walton》(5:54)
9. ボリビア
Bolivia《C. Walton》(7:50)
10. 雨月
Ugetsu《C. Walton》(6:04)

シダー・ウォルトン Cedar Walton《piano》
デヴィッド・ウイリアムス David Williams《bass》
ジミー・コブ Jimmy Cobb《drums》

録音：2005年3月18日　アヴァター・スタジオ、ニューヨーク

℗© 2005 Venus Records, Inc. Manufactured by Venus Records, Inc., Tokyo, Japan.

＊

Produced by Tetsuo Hara and Todd Barkan.
Recorded by David Darlington at Avatar Studio in New York on March 18 , 2005.
Mixed and Mastered by Venus 24bit Hyper Magnum Sound :
Shuji Kitamura and Tetsuo Hara.
Front Cover Photo : © Jeanloup Sieff / G. I. P.Tokyo.
Artist photos by Mary Jane Rosen.
Designed by Taz.

ピアノのシダー・ウォルトンは1934年の生まれだからもうすでに70歳を超す年回りになっているが、プレイを聴く限りにおいては3〜40歳台の若い世代にも決して負けない溌剌とした生気を感じさせているのは嬉しい限りだ。彼は今年(2005年）も5月から6月にかけて日本の各地で開催される10人のピアニストを舞台に乗せる人気コンサート「富士通スペシャル100 GOLD FINGERS」で来日するが、この公演のレギュラーに復帰したのは2001年からで、このあたりにもシダー・ウォルトンの近年の演奏家としての充実ぶりが示されているといっていいだろう。来日する直前、4月20日から23日にかけてシダーはニューヨークの人気ジャズ・クラブ「バードランド」にもベースのデビッド・ウイリアムス（このアルバムでも共演している）を加えたトリオで出演することになっており、相変わらず多忙な演奏活動を精力的にこなしているようだ。

精力的という意味では、シダー・ウォルトンが長らく住み慣れたウエスト・コーストからジャズの中心地であるニューヨークに拠点を移したのは2000年のことで、ここにも彼のミュージシャンとしての気概を読みとることができる。年齢が70歳にも近くなれば、どちらかといえば、気候も温暖で、日々の生活のテンポもゆるやかなカリフォルニアは天国のようにも思えるが、それをあえて断ち切って刺激も強く競争も激しいニューヨークのジャズ界に復帰したのは、それだけ彼の創造意欲が充実しているからとみて差し支えないだろう。その一方で、1999年にはワシントンで開催されたセロニアス・モンク・ジャズ・コンペティソンの「ピアノ」部門の選考では、シダー・ウォルトンはハービー・ハンコックやケニー・バロンらとともに審査委員を務めており、音楽生活40年を迎えてシダーはいまや押しも押されもしないジャズ・ピアノ界の巨人の１人になったといっていいだろう。

ところが、シダー・ウォルトンの近年の吹き込み歴をみてみると、2002年の「ラテン・ティンジ」（Highnote）以来、残念ながらこの3年ほどは新作の発表が途絶えており、レコーディングに関するかぎりいささか不遇をかこっていた――というのが現実だったのだ。そこに嬉しい救世主が現われた！我がヴィーナス・レーベルの原プロデューサーである。しばらく前、「シダー・ウォルトンの新作をつくりました。彼は作曲も素晴らしいので、今回は、彼にお気に入りの自作曲を選んでもらい、トリオで自由に演奏してもらったんですが、とてもいい内容になったと思いますので、是非、ライナー・ノーツを書いていただけませんか」と原プロデューサーから電話をもらったときは二つ返事でOKした。シダー・ウォルトンが優れた作曲の才能に恵まれていることは、すでにジャズの準スタンダードになっている＜ボリビア＞＜モザイク＞＜雨月＞＜シダーズ・ブルーズ＞＜ミッドナイト・ワルツ＞といった傑作がいずれも彼の作曲であるといえばたちまち納得していただけるだろう。演奏家としていままさに円熟の頂点に上りつめているベテラン、シダー・ウォルトンに自作曲を思いっきり演奏してもらう、これは期待に胸が高鳴る企画といっていい。しかも、演奏メンバーの人選でも嬉しい試みが実現した。シダー・ウォルトンとベースのデビッド・ウイリアムス（58歳）は1980年代からコンビを組んで活動してきた無二の音楽仲間だが、今回は、そこにマイルス・デイビスの不朽の名作「カインド・オブ・ブルー」セッションにドラマーとして加わったことで有名な伝説の名手ジミー・コブ（76歳）が加わっているのだ。なんとシダー・ウォルトンとジミー・コブがレコーディングで共演したのは今回が初めてなのだ！。これはヴィーナス・レーベルが久々にはなった快挙といっていいだろう。さ、それでは、「シダー・プレイズ・ウォルトン」に聴かれる曲目について、以下にその調査結果を報告しておきたい。

1）ブレモンズ・ブルーズ　1986年に録音されたシダー・ウォルトン・オクテットの「プレイズ」というアルバムで紹介されたオリジナル。シダーのお気に入りのナンバーのようで、1989年(トリオ）と1992年(ソロ）に録音しているほか2000年にはカナダのデイヴ・ヤング（ベース）のトリオに加わって4度目の録音も残している。ここでもシダーのピアノは快調で、次々にめまぐるしくソロ・フレーズが弾き出される。

2）ターコイズ　シダー・ウォルトンの作品としてはもっとも初期のオリジナル。ミディアム・スロウの美しい旋律で書かれたワルツ曲。映画音楽にもなりそうな佳曲だ。初演はトランペットのブルー・ミッチェルの「カップ・ベアラー」(1962年録音）にきかれる。ほかにもミルト・ジャクソンの吹き込みもある。シダー自身は1993年に一度、トリオで録音したことがあり、今回は12年ぶりの再演。ピアノ、ベース、ピアノとドラムスの対話が登場する。映画に使っても良さそうな曲だ。

3) シダーズ・ブルーズ　1981年にピアノ・ソロで録音したのが最初で、いらい、これが5回目の録音。
1985年にはこの曲名をタイトルにしたアルバムも創っている。シダーがつくったバップの伝統に根ざしたブルース・プレイが聴かれる。ピアノが7コーラス、ベースが3コーラス、ピアノとドラムスによる4小節の交換が3コーラスという構成。快調にスイングするビートに乗って、シダーのソロもグルービーだ。2001年にはオランダのギタリスト、ジェシー・ヴァン・ルーラーが自己のカルテットでクリス・クロス・レーベルに録音している。

4）ミッドナイト・ワルツ　シダー・ウォルトンが1970年代に作曲した名曲。本アルバムのタイトルにもなったこちらは1974年の作曲で、テナー・サックスのクリフ・ジョーダンとシダー・ウォルトンのトリオによって吹き込まれた「ハーフ・ノート」（SteepleChase）に初演が聴かれる。以来、1982年にはシダー自身が吹き込んでいるほか、ミルト・ジャクソンも1984年に録音している。曲は題名通りにワルツ・ナンバーで、これも9分を超える演奏になっている。ソロはピアノ、ベース、ドラムスへと移行し、ラストにピアノとドラムス（ブラシ）によるチェイスが登場するする。シダーの入魂のプレイが圧巻だ。

5）ホーリー・ランド　「聖地」と名付けられたクラシカルな響きとゴスペル調が一体となったウォルトンの名曲のひとつ。1968年にシダーも加わったヒューストン・パーソンのアルバム「ブルー・オデッセイ」（プレスティッジ）に初録音が聴かれる。以来、今日までに20種以上もの録音がクリフ・ジョーダン、ミルト・ジャクソン、ホレス・パーランら多彩なミュージシャンによって残されている。シダー自身も1973年、1977年、1985年、1990年とすでに何回も吹き込んでいる。ピアノとともにここではベース、ドラムスが活躍し、活力に満ちた演奏を聴かせる。

6）テーマ・フォー・ジョビン　アルバムに収録されたシダーの曲ではこの曲がもっとも近年のもので1996年に彼の「コンポーザー」（Astor Place）というアルバムで初めて紹介された。1963年にジェリー・マリガンが作曲した同じタイトルの曲もあるが、それとは同名異曲である。題名からも推測されるように曲はアントニオ・カルロス・ジョビンに捧げられていて、演奏はボサノバ・タッチのリズムに乗せてくり広げられる。

7）ディア・ルース　これもシダーが90年代に作曲したオリジナルだが、自己のユニットによる吹き込みは今回が初めてで、ほとんど知られていない。1995年にティム・ヘイガンズ(トランペット)とクレイグ・ハリス(テナー・サックス)をフィーチュアーしたオールスターズが「プライマル・ブルース」(Hip Bop Esssence)というアルバムに一度だけ吹き込みが残されている。トリオの演奏はアルバム中で最も長い10分を超える聴きものになっている。ミディアム・スロウのゆるやかなテンポで、シダーは無駄な音を一切そぎ落として、じっくりとピアノを弾き込んでいる。至難のスロウ・テンポにもかかわらず最後まで聴き手の気持ちをつかんで放さないあたりはさすがに大御所の風格十分だ。

8）ザ・ビジョン　この曲もシダーのアルバム「コンポーザー」に収められていた曲で、こちらは1993年の作曲。シダー・ウォルトンの作曲家としての才能が遺憾なく示された名曲のひとつで、彼の代表曲といっていい。シダーは2003年に自己のトリオで吹き込んだ「ラテン・ティンジ」（Highnote)と題するアルバムでも演奏しており、これが3回目の吹き込みになる。ここではシダー・ウォルトンのピアノとともに「カインド・オブ・ブルー」伝説の名ドラマー、ジミー・コブが＜ソー・ホワット＞でのプレイを想起させるあのワイヤ・ブラシによるマジックを再現しているのが聴きものだ。

9）ボリビア　1975年にシダー・ウォルトンの「イースタン・レベリオン」（Timeless）というアルバムで紹介されたこの曲は、まぎれもなく彼のもっともよく知られたオリジナルのひとつ。ミルト・ジャクソン、フレディー・ハバード、フィーリー・ジョー・ジョーンズらによってすでに40種を超えるカバーが残されている。シダーとは20年間もコンビを組んできたベースのデビッド・ウイリアムスが良き脇役として見事なサポートを聴かせている。ジミー・コブのシンバル・サウンドを巧みに活かしたアクセントの付け方も秀逸だ。トリオの一丸となった素晴らしいプレイが最高。

10)雨月　シダー・ウォルトンがアート・ブレイキーのジャズ・メッセンジャーズ在団当時の1963年に創った曲で、1963年にジャズ・メッセンジャーズによって初吹き込みされ、アルバムのタイトルにもなった。シダー・ウォルトン自身は1969年にプレスティッジの「ジ・エレクトリック・ブーガルー・ソング」で初めて録音。いらい、ジーン・アモンズ、レッド・ロドニーほかによって録音されている。ヴィーナス・レーベルのエリック・アレキサンダーをフィーチュアーした「ワン・フォー・オール/危険な関係のブルース」(2003年録音）というアルバムでもこの曲が聴かれる。この演奏では、シダーはアドリブに＜飾りの付いた四輪馬車＞を引用するユーモアを発揮してみせる。ほかにも聞き覚えのあるメロディがところどころで弾き出され、一気阿世にソロを終えている。

児山紀芳（Kiyoshi Boxman Koyama）